東京蜘蛛談話会
談話会通信
2020年
2月4日
No. 158

2020 年度 東京蜘蛛談話会総会例会

1. 日時　2020 年 4 月 29 日(水祝)　10 時より(開場 9 時 30 分)
2. 場所　東京環境工科専門学校　〒120-0022　東京都墨田区江東橋 3-3-7
   JR 総武線　東京メトロ半蔵門線　**錦糸町駅南口**から徒歩 3 分
3. 連絡　当日は，東京環境工科専門学校の電話が使用できないので，緊急時には以下に連絡ください.
   加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他　プロジェクター，OHP 等用意いたします.
5. 講演をご希望の方は，演題と使用希望機材
   (スライド，OHP，コンピュータ)
   を事務局初芝までお知らせください.

〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8　コンフィデンス高垣 105
有限会社エコシス　初芝伸吾
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel : 042-501-2651　Fax:042-501-2652

●錦糸町駅南口から徒歩 3 分です.

東京蜘蛛談話会 2019 年度採集観察会

1. 期　日：　第 4 回 2020 年 2 月 16 日（日）
2. 場　所：　天覧山
3. 集　合：　集合 10：00
   西武池袋線飯能駅改札
   徒歩で天覧山まで移動
   遅れた方は，バスもあります．（ただし 1 時間に 2 本）
4. 世話人：　平松毅久 080-6633-2737・嶋田順一

東京蜘蛛談話会 2020 年度採集観察会

1. 期　日：　第 1 回 2020 年　5 月 10 日（日）　第 2 回 2020 年 7 月 12 日（日）
   第 3 回 2020 年 10 月 18 日（日）　第 4 回 2021 年 2 月 14 日（日）
2. 場　所：　円海山（横浜市氷取沢市民の森）
3. 集　合：　集合 10：00
   JR 京浜東北・根岸線　港南台駅
4. 世話人：　安田明雄

東京蜘蛛談話会 2020 年度合宿

2020 年度の合宿は，日本蜘蛛学会大会に続けて熊本県熊本市を拠点として行います．詳細は通信次号でご案内いたします．

入退会は：事務局　初芝伸吾　〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス
E-mail：hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

東京蜘蛛談話会の会費は，一般 2000 円，学生 1000 円です．
会費は郵便振替口座　00170-8-74885　東京蜘蛛談話会へお願いします．
会費のことは：会計担当　須黒達巳
〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎
TEL：080-5683-2765　E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

※談話会の会費は前納制となっております．本号に請求書と振込用紙を同封いたしましたので来年度分までの会費の納入をお願いいたします

東京蜘蛛談話会例会

2019 年 12 月 1 日　東京環境工科専門学校にて

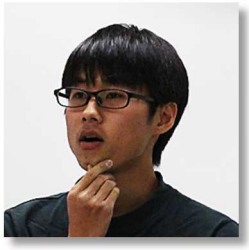
参加者一同

（1）海外のクモ　ブルガリア・ボルネオ

浅間　茂

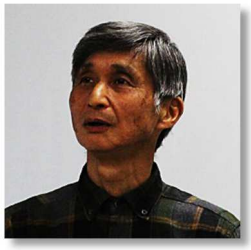
（2）数本の糸で狩りをするクモ：ツクネグモとヒシガタグモの食性について

鈴木佑弥



（3）洪水頻度と石河原のクモ

安藤昭久



（4）やっぱり新種だったビジョオニグモ

谷川明男

通信原稿投稿先：谷川明男　〒247-0007　横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail：dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは，4 月末まで，8 月末，12 月末です.

（5）ヒメグモ類の網の多様性およびオオヒメグモの不規則網の「規則性」

新海　明

（6）アマミハグモの生活史①・オダカグモは子育てをするか

平松毅久

京都だより（10）ヒトエグモをひと目見たくて

新 海　明

私がクモに興味を持ち熱心にやるようになった中高生の時代は，意外にも珍蛛を数々ゲットした．シャラクダニグモ・オビボソカニグモ・キマダラヒラタヒメグモなどだ．だが採集したクモの中で，私の感動はアカイロトリノフンダマシに勝るものはない．私にとっては葉裏にくっついた「赤い宝石」だった．

シャラクダニグモやキマダラヒラタヒメグモなどと違い，やはりアカイロトリノフンダマシはクモ採集家を魅了するクモなのだ．これに匹敵するクモといえば，言わずと知れたワクドツキジグモやイセキグモ類，そしてカトウツケオグモやヒトエグモなどがあげられよう．いずれもレアであるとともに「魅せられる」クモだからだろう．

今でこそワクドツキジもイセキグモ類も，日本の各地でぽつぽつと採集記録が載るようになったが，かつては「幻のクモ」だった．私がクモの採集を始めたころには「一生に一度採れるかどうか」と言われていた．そして，ヒトエグモは数年や十数年に一度，関西から「採集情報」がもたらされるくらいで，関東にいる私は「採集は無理だろう」とあきらめていた存在だった．兄によれば生息地は関西それも奈良京都の神社仏閣さらに室内だというではないか．たまさか訪れる京都のひと気ない寺院で，じっくりと壁面の隙間をのぞいてみたこともあったが気配を感じたことすらなかった．

それが，藤野義人さんらによって関西で大量に発見され，その生活史まで調査されたという．「これは京都に行くしかない」と決心して 2019 年 2 月，名古屋で毎年開かれる中部蜘蛛懇談会の総会に合わせて関西にヒトエグモ探しに乗り込んだ．いつも同行してくれる谷川さんは国際クモ学会のシンポジウムに呼ばれてニュージーランドに出かけていた．というわけで，今回は関西在住の金野さんに案内してもらった．藤野さんがすでに調べてある神社仏閣に行くのはプライド（あまりないのだが…）が許さなかったが，いる場所で一応生息している場所の確認をしておいた方が良いだろうということに

なった．金野さんが最初に選んだのは，京都のはずれにある柳谷観音だった．

まずは寺院の石垣の隙間を，目を皿のようにして見ていった．さらに，寺院の脇から山中に道が延びていた．そこを進むと瓦屋根が無造作に捨てられていた．「ここだ」と思って行くと，すでに金野さんも探していた．思いは同じようだ．瓦を一つずつめくりながら，目を凝らした…が「いなかった」．いくら探しても「いない」となると，冬の寒さが身に沁みこんできた．寒さもあり，ここはあきらめて，次に松尾大社に向かった．かつて，この神社は観光で訪れたことがあったが，到着すると「やけに神社の境内が明るくなっている」と金野さんが言う．気分的なものではなく，神社の域内に光が差し込んで明るかったのだ．しばらく境内に進むと理由が分かった．一昨年（2018 年），関西を直撃した二つの台風により，境内の樹木が風倒にあったせいだ．ここ松尾大社でも「ここは」と思われる場所を探し回ったのだがヒトエグモは発見できなかった．冬のせいにしたり，密度の低いせいにしたりしたが採れなくては仕方がない．あきらめて京都西郊の別の神社仏閣に移動したが…，いずれも見つけるには至らなかった．やはり簡単に見つけることはできないようだ．冬の日は短い．既に西にかなり傾いていた．

私は，今日のうちに名古屋入りしなくてはならなかったために，気がせいた．「ヒトエをひと目見る」ために，藤野さんの調査地である上御霊神社に行くことにした．上御霊神社も以前に私は行ったことがあった．桜の時期で鴨川沿いの桜を眺めながら，川端からこの神社に入った覚えがある．とても静寂で落ち着いた雰囲気の社だった．その佇まいは前回とまったく変わらなかった．灯篭を見つけると，その上にいずれも平らな石が置いてあった．藤野さんの仕掛けだろう．4 つ目の灯篭でヒトエグモのちび助を「見つけた」．さらに，そのそばの灯篭上の石の下にはメスの成体「こいつは大きい」ものだった．こんなところにいるのか．見つけてしまえば何のことはなかった．特別な場所に生息しているわけでもなかった．金野さん曰く「土と接した石の下にはいないようだ」．確かにそんな気がした．

ただの一度，実際の生息状況を「知ったか，知らない」かは，やはり大きな違いがある．念のために言っておくが，ここのヒトエグモは藤野さんの調査のために採集などはしなかった．この目で自然下のヒトエグモを確認したかっただけである．「ナルホド，こんな風に冬でもいるのか」．野外で初めて見たヒトエグモの姿を脳裏に刻み込んで，名古屋へと新幹線に乗り込み，京都を後にした．

（この原稿を認めてから，藤野さんからヒトエグモに関するさまざまな情報を頂いた．そして京都に来た折には「ご案内します」と記されていた．けれどもこんなわけで，すでにヒトエグモを観た後であった．藤野さん，次の機会に是非お会いしてヒトエ談義に花を咲かせましょう）

夢のつづきは
(ハエトリグモのタクヘイ)

加 藤 康 子

夢とは，眠りの庭を飾る花のようだと言う人がいる．夢は分析され，占われて，もはや余白もないように思われるが，私は単純に夢を見るのが好きだ．悪夢でなければ，どの夢にも不思議の魅力があると思う．

今まで，長い年月を過ごしてきて，数えきれない夢を見てきた．ドラマチックな展開のストーリーもあれば，若い頃には，空を飛ぶ夢ばかり続けて見たものだ．日常の世界を抜けて，はるばる時をこえ，変幻自在の空間に行くことだってできる．

けれども，夢はやっぱり夢でしかなく，現実とは違って，はかないひとときのものである．誰もが知っているとおり，目が覚めてしまえばその記憶はまたたくまに不確かになってゆく．うっかり油断して，欠伸ひとつしている隙に消えた，なんてことも起きる．

覚めたばかりのぼんやりとした頭で

「えーとなんだっけ？」と考えている暇はなく，指先からこぼれる塵のように呆気ないものである．

たしかに，何かを見ていたことは憶えている．けれど，だからといって，頭の中を，ためつすがめつ眺め回して，思い出した小さな欠片をならべてみても，まあ，夢だからこんなものだよと，思うだけだろう．

それに，わたしたちは夜になれば新しい夢を次々と見ることができ，眠るだけでひとときの歓待にあずかれるその世界を，いつでも体験できると解っている．

それでも，時には運良く心にとどまってくれる夢もある．どんな印象と，どれほどの刺激を脳にもたらしたから，そうなるという理由は知らないが，鮮やかによみがえってくる場面のひとつひとつを，絵本に向かう子供のように繰り返し眺めて，気がすむまで反芻する楽しさ．

この夢の追体験のなかで現実では起こり得ない感覚とか，色彩や造形が出てくることがしばしばあって，私にはそれが一番の楽しみだった．眠っているあいだに，こんなにわくわくと想像力を満たされて，何も悩ましいことなど無いはずなのだが，いずれにしろ，“夢は必ず覚める”という現実がある限り思い通りにいかないのは当然のことだろう．

それは，目覚めるためのいくつかの要素．意識が動き始めるときのゆるやかな変化というものを踏まないままに，プツンと跡切れたときの喪失感といったらいいだろうか．そんなものが気になっている．

たとえば，ちょっとシュールで興味をそそられる夢を見ているとしよう．いつもなら

年老いた私は，足裏をしっかりと地面にくっつけて歩いても，ゆらゆらとする心もとない脚力しか持ち合わせていない．

でも，そこにいる私は，つま先旋回をして気分よく跳んでいる．思いがけないチャンス到来と喜んで，ここぞとばかりに張り切って跳んでいる．体が軽い，バランスだって上手にとれる．すっかり若い頃に戻っているのではないか．そう思い込むと不思議なもので五感も細やかに反応し，心はぬくぬくと伸びをすることができるのである．

もはや夢のエネルギーにとりこまれて，調子に乗った自信過剰の私の空想は止め処がなくなる．なにしろ，さっきまでつま先旋回ができたのだから・・・．夢の中では，なんでも自由にやれるはずと勝手に付け加えて，じっとしていられない気持ちに駆られている．

実は，それが一番良くないことなのだ．そんなとき，現実の老人の体に起きることは，多分血圧の上昇と脈拍の増加だろう．シュールな夢の世界はとても移り気だ．まごまごしているうちに取り残されてしまう．

あっ，と気がつくと夢はプツンと跡切れ，目が覚めている．

『エーッ』と思ったって，慌てて目をつぶったって，すでに手後れだ．逃した夢のつづきはもう帰ってこない．たかが夢というけれど，あれこれと思いは巡っていく．

もしも，夢をゆっくりと楽しもうと思うなら，素直になろうということ．おだやかに眠り続けることができれば，夢の抽斗をいっぱい開けて見ることもできる．たとえ，どんなに荒唐無稽なものが現れても，どんな不条理が起きようとも，決して驚くことなく，柔らかい気持であるがままを受け入れる．敏感に反応したり無理をしてはいけない．疑問なんて持たないことだ．

そういうわけで，今，にわかに信じられないものを目の前にして，とりあえず平静になろうと私は考えた．この状況が跡切れてしまわないように細心の注意をはらおう．

こんな野原の真ん中で，変身したハエトリグモに出会うなんて夢以外ではあり得ない．

「面白すぎる」

それならばこの出会いを喜んで存分に楽しもうではないか．私は，はやる気持ちを抑えて，さっきから自慢気に胸を張り大きな目をキラキラさせているハエトリグモの男の子の前に立つと，一気に喋り始めた．

「わかったわ，これは特別な夢で，私へのサプライズというわけね．キミの言葉を信じるわ，ハエトリグモのタクヘイくん，奇妙なことと最初は思ったけど，きっと私は心の奥でこれを求めていた気がするの．以前，図鑑でたくさんのハエトリグモを見て，その愛らしさに感動し，実物に会いたいと常々願っていた．それが今，適っているってことね．そういうことならあらためて言います．初めましてタクヘイくん

「タクくんでいいですよ」

彼はピョコッと一跳びすると，ぐっと近づき私に寄り添って立った．

すると，なんということだろう．今となってはあまりに遠退いてしまい，久しくよみがえることのなかった感情がむくむくと湧いてきた．ずっと昔からの，馴染みある“あの匂い”それを彼が発散していたからだ．

「日なたと，草いきれと，砂と小石と木の皮と，乾いた鼻汁をごちゃ混ぜにしたような」幼い男の子だけが持っている，魅力的な真昼の匂いが，私を取りかこみ，ふんわりと膨らんでくる．

私は彼に悟られないように，そっと身を屈めて，鼻孔いっぱいにその匂いを吸い込んだ．